

D 16 だんらん空間に関する研究(第1報)

(その2)だんらん空間の使い方

大阪教育大 岸本幸臣 神戸山手女子短大 ○中西真弓

目的 本編では前編に引き続き調査対象世帯におけるだんらん空間の使い方に着目して行為面からみた、だんらん空間の類型とだんらん行為の内容について述べる。

方法 前編と同じ。

結果 (1)だんらん空間の行為類型 だんらん空間で実際に行なわれる行為により類型化すると「L+DK」型は43.1%とまりで、プラン類型の率より大巾に低い。「LDK」型は16.7%でプラン類型に比較的近い。更に「L分離率」を求めると64.2%の存在がみられる。(2)だんらん室専用性 だんらん室が「専用化」しているのは20.7%と低く、多くは他の住生活行為と兼用している。「だんらん+食事」(38.6%)や「だんらん+食事+接客」(34.1%)がその代表的なものである。(3)プラン類型と行為類型 概ね半数の居住者はプラン類型に沿った行為類型を示している。タイプ別ではプラン「LD+K」型に行為面での同一率が高く68.8%に達している。プラン「L+D+K」型には行為類型の「LD+K」型の食事とだんらんの兼用の発生が28.6%、プラン「LDK」型には行為類型「L+DK」型のだんらん独立の発生が29.6%みられる。即ちだんらん空間をめぐって、食事・接客機能との併用の多面性が伺える。(4)だんらんの内容 「会話」・「食事」・「TV」がだんらんを構成する三大要因として抽出される。まただんらんの時間長は、平均で1.2時間と、比較的短時間の内に、雑多な行為を含んで展開している。(5)まとめ だんらん空間の実態を行為面からみると、「L」分離の動きは案外低率で、そこには食事行為・接客行為とのかねあわせの複雑性や、だんらん空間のもつ公的機能の重層性の影響のあることが伺えた。